

一度しかない人生 — 夢は大きく!

大倉 由紀枝 先生

大倉 由紀枝(おおくら ゆきえ)

国立音楽大学声楽科卒業。東京芸術大学大学院オペラ科修了。第13回民音コンクール第一位受賞。ミラノに留学。帰国後、「カブラーティ家とモンテッキ家」のジュリエッタでデビュー。その後、数々の主役に抜擢され好評を博す。2002年2月に二期会創立50周年記念公演「フィガロの結婚」の伯爵夫人を、2003年1～2月新国立劇場「アラベッラ」のタイトルロール、7月に二期会=ケルン市立歌劇場共同制作「ばらの騎士」元帥夫人、と大役を演じ絶賛される。コンサートも国内外の著名な指揮者やオーケストラとの共演も多く、小澤征爾と新日フィルによるコンサートオペラ、シュトラウス「サロメ」、若杉弘とN響によるオネゲル「火刑台上のジャンヌ・ダルク」他、レパートリーも広い。2010年6月、新国立劇場にて新作オペラ「鹿鳴館」の朝子役で世界初演の重責を果たす。国立音楽大学・大学院兼任教授、玉川大学非常勤講師、二期会幹事。



明るいオーラで登場の先生！
一瞬で雰囲気が変わりました。

みんな歌好き

—ご出身は、いわき市ですか？

大倉 そうなんです。自然が美しいところで、海あり山あり、温泉あり、空気も食べ物も美味しいし、東北の湘南って言われるぐらい穏やかな所でした。震災があつて今は悲しく、憂っています。

—音楽との出会いはい？

大倉 合唱は、先生から声をかけられて四年生からやっていました。が、五年生の時、学芸会で独唱に選ばれ《とんび》の歌を歌いました。それで人前で歌うことの楽しさを知りました。

—お宅では？

大倉 親戚みんなが歌好きで、お正月とかお盆とかに集つたとき、年が近い従妹達と、いつも合唱していました。そういう時、私は旋律じゃなくて、適当に下のメロディを付けてハモらせるのが大好きでした。特に「ザ・ピーナツ」の歌はよく歌いました。ホクロをつけてお姉さんのほうを(大笑)。

小学校二年生の時に、ピアノかバレエか習いたくて親に言ったら、バレエは衣装にすぐお金がかか

るらしいって言われて、それでピアノのほうを。でも後で考えたらピアノを買うほうが、お金がかかりますよね(大笑)。

ところが六年生の時にピアノの先生が亡くなられて。大変ショックで、他の先生につくのも嫌で、レッスンを止めてしまいました。自己流で続けてはいましたが…。

—中・高はどのように？

大倉 福島は合唱が盛んなところだったので、中学・高校とも自ら合唱部に入って、コンクールなどに出場し練習に励んでいました。

高校は共学でしたので、混声四部で、モンテヴェルディのマドリガーレや宗教曲を歌っていました。いつも「美しい響きを求め、心を一つに！」を合言葉に練習し、部屋に「和」という文字が飾ってありました。副部長にも選ばれ充実した三年間を送りました。

カンマーコールにあこがれて

—受験準備は？

大倉 実はずっと薬剤師になろうと思っていて、高校三年の夏休みまで課外授業も全部私立理科系で受けていました。ところが、合唱部に顧問として来られた国立の教育音楽出身の先生から、音大の

お話を聞いたときに何か心が揺れるんです。進路としては考えていなかったのに、だんだん音楽というものに魅力を感じてきて、もともと深く勉強してみたいという気持ちになってしまったのです。国立音楽大学を選んだ理由は、カンマーコールのいわき公演を聴きに行った時に、生き生きと楽しそうに演奏する姿に感動し、私も一緒に歌いたいと思ひ、心が決まりました。そして先生に「音楽大学ってどんな試験があるんですか？音大に入りたいので教えて下さい」と言ったら、「責任が持てない」と、即断わられてしまいました。それでも何度もアタックして、先生が「わかったわ」と言つて下さったのが十月でした。

— 十月からですか？

大倉 それからは、ほとんど毎日学校の帰りに先生のお宅にお邪魔して、歌とピアノと楽典、ソルフレージュ…、全部教えていただき、運良く入学できました。今考えれば無謀なことですよ。よく引き受けて下さったと思います。今でも頭が上がりません。感謝するのみです。

発声に生き、発声に生き

— 当時の大学の雰囲気はどうでしたか？

大倉 国立校舎と玉川上水校舎の両方で授業をしていて、入学式や卒業式、芸術祭もすべて国立校舎でした。

学生運動の活発な時代でしたので「授業料値上げ」に反対して下さった先輩達のおかげで、私の時は据置きで入学金・授業料あわせて28万円でした。声楽科は、当時一年生一九〇人くらいだったので、エネルギーに溢れていました。

— 学生生活はいかがでした？

大倉 入学して二年間は西北寮にいました。二人部屋で一年先輩と一緒に、今でもお付き合いがあります。寝食を共にしますから先輩というよりは家族みたいな感じ。：。そういえば国立にジュビターという音楽喫茶があつて、よく行っていました。

— レッスンはいかがでした？

大倉 古田美代子先生との45分間の個人レッスンは、貴重な時間でした。厳しい先生で、四年間は発声を中心。「あんたが憎くて怒ってるんじゃない／あんたの出す声が嫌なのよ」って、いつも言われました。先生の理想の声を目指しました。「歌に生き 愛に生き」じゃなく、「発声に生き 発声に生き」でした

ね。(笑)。

とにかく発声の道、体の中に道を作る／声楽は身体が楽器ですから、「正しいフォームを学び、正しい呼吸をし、正しい声の道を作る」、その道をとにかく見つけるために勉強していました。今の私の基本は、古田先生のお教えとレッスンの賜物と思っています。

— あこがれのカンマーコールには所属されたのですか？

大倉 残念ながら先生の判断でレッスン一筋に：。合唱とはお別れしました。

大学院・優勝・留学

— 大学院は芸大でしたか？

大倉 古田先生が四年生の時にご病気になられ、卒業と同時に亡くなられました。先生として人間として古田先生を尊敬していましたので、大変なショックでした。この先どうしようかと悩んだ末、もう一度勉強する道を選び、先輩の紹介で柴田喜代子・睦陸先生の門を叩きました。とても気さくでおおらかなご夫婦で、自由に伸び伸び声を出すことを教えてくださいました。何度目かのレッスンで「芸大受けてみたら？」とおっしゃるので、ダメもと、半信半疑で受験

したら合格／驚いている私に、「運がいいのも実力のうち」と笑つて言つて下さいました(大笑)。

— オペラは、大学院の時ですか？

大倉 はい。大学院と同時に二期会研修生にもなりました。研修生は二期会オペラ本公演の合唱に出ることが義務付けられていたので《ボリス・ゴドノフ》《ファウスト》《蝶々夫人》などに出演し、ペテラの歌手の方々を間近に見ながらオペラの厳しきや楽しき奥深さを学びました。

大学院では「こんなにやく体操」というのがあつて、自分の体幹を知るのに役立ちました。バレエや日本舞踊など身体表現を通し、歌い演ずることの基礎を学び、大学院オペラではジョルダナーノの《聖母マリアの月》とプッチーニの《修道女アンジェリカ》の主役をいただき、充実した三年間でした。

— 憧れていた歌手は？

大倉 フレーニとカバリエかしら？伸びやかで豊かな声の響き。カバリエの巨体から繰り広げられる上品な音色のピアノニッシモが好きでした。

— 大学院の時に民音コンクール^{※1}で優勝されますか？

大倉 初めは、毎日コンクール^{※2}を受けるための度胸だめしとして

※1 1967年から行われた民主音楽協会主催の音楽コンクール。声楽・作曲・室内楽・指揮と部門を変えて毎年行われていた。1988年より東京国際音楽コンクール(指揮)となっている。

※2 現在の日本音楽コンクール。



受けたら、優勝してしまつて……。柴田先生が「二度一等とつたら、二度はいらん」とおっしゃつて、結局毎日コンクールは受けませんでした。

— 留学されるのは？

大倉 コンクールのご褒美で翌年にイタリアへ一年行きました。留学することになつた時、柴田先生は、「よかつたな、おまえ。西洋の音楽をやるんだから、文化を知ることが大事だぞ。歌は日本にいてうまくならん者が、イタリアへ行つたからといって、うまくなるはずないんだからな」とおっしゃつり、留学のプレッシャーを和らげて下さいました。文化を知ることが音楽の深さにつながるつて、食べたり、見たり、聞いたりして楽しんでこいつて。だから、その通りにしました(大笑)。同門の林康子さんにグアリーニ先生を紹介していただき、アジリタの勉強やベル・カントの曲を中心に勉強しました。

オペラ・夢の舞台

— オペラ・デビューは？

大倉 八一年三月の藤原歌劇団公演、ベルリーニ《カプレーティ家とモンテツキ家》のジュリエッタ

役で、指揮がニコラ・ルツチ先生演出が栗国安彦さんでした。偶然イタリアでスバルティートを勉強してきましたが、当時のオペラは日本語が主流で苦勞しました。

— 色々な役をされるのですか？

大倉 その後すぐに、《ジャンニ・スキツキ》《コシ・ファン・トゥツテ》《フィガロの結婚》など立て続けに出演。オペラ歌手としての道を歩むことになりました。特にモーツアルトは大好きで、四大オペラでは色々な方と共演しました。アンサンブル・オペラですし、元々合唱出身なので、アンサンブルになると血が騒ぐというか、何かより美しいアンサンブルにしてやるノっていう気持ちになつてしまふのです(大笑)。

— お好きな役は？

大倉 モーツアルトでは《フィガロの結婚》の伯爵夫人。今も昔も変わらぬ男女の駆け引きが面白い。シュトラウスでは《アラベツラ》、女性冥利に尽きるとつても幸せな役。小澤征爾指揮、オッフエンバックの《ホフマン物語》ではオリンピア、アントニア、ジュリエッタ、ステラの四役を一人で歌い、音楽を満喫しました。

オペラは人に夢を与える舞台空間で、しかも自分とは違う人物に

なれるから楽しいのです。

— 舞台の先輩として何か是非。

大倉 そうですね、歌だけ勉強していればいいというものではなく、やはり舞台には、その人が出ます。音楽に対して誠実に向き合っているか、どのように勉強しているか、どのような生活をしているのかも露わになつてしまいます。で、どうしたらいいかというと、良い歌を歌うための努力をする必要があります。中々難しいですけど、それを日々の中で考えることが大事です。志高く、すぐに成果が出なくても、そうした生活を続けていくことで、ミュージックが本番の時にやつて来てくれるのではないかと、という信念でやつていきます。

— どのような生活を？

大倉 喉の管理はもちろん、日頃から健康面、精神面の自己管理。たとえば、明日日本番、あるいはレッスンのために、夜中までしゃべつちやつたとか、飲んじやつたとか、不摂生な生活をして良い歌は歌えないと学生には言っています。それから、人間、生きていけば悲しいことも辛いことも苦しいことも日常茶飯事。でも、歌う時にはスィッチを切り替えて、明るく、前向きに、全身全霊、心を込めて歌わなくてははいけません。オペラな

ら、そのキャラクターになりきるとか。本番の時に、家族が病気で寝不足ですとか、喧嘩したから声が出ませんとか、言えないのです。だから、ちゃんと切り換える心の強さを持つというか、育てるというか、その心構え・方法を磨くという言い方で教えています。

— 本番対策を何か？

大倉 よく「練習は本番のように、本番は練習のように」つて言うじゃないですか。練習する時は本番のような緊張感をもつて練習し、本番の時はリラックスして、練習している時と同じような状態をイメージして自分の中に作り、集中する。私の場合は集中することにより、コントロールが効き自由に歌えます。でも、自分で、ああ、もう一つ詰めが甘かつたとか、不安材料を抱えていると、それが出てしまうのではないかなと思うんです。本番は、根拠のある自信と集中力かしら。

— 発声について何か？

大倉 大学院の時に習つた指揮者のニコラ・ルツチ先生は、マスターカーニと交流があり、積極的にひろめてられました。私もオペラ《イリス》を教えていただきました。先生にさんざんレッスンしていただいた後に「アナタ、コエアリマ



ス。アタマアリマセン。ウチ、ペンキョウノ」と言われ、かなり落ち込んで友達に話したら、「うん、先生、日本語それしか分からないし、みんなに言ってるから大丈夫」って(大笑)。でも、先生がおっしゃっていた、「コエヲ マゲテ(ジラーレ)」「ムネヲ タカク(ハイ・チェスト)」「イキヲ ウエニ(スル・フィアート)」「ササエテ(アッポジャート)」など、イタリアの音色や響きを体験する貴重なレッスンでした。その時は難しかったけれど、今は、教えていただいた良かったと心から思います。

表現です。ただ、大きな声だけでは芸がありません(大笑)。「音楽はピアノニツシモが命」と思っています。

夢を実現させるための努力

―夢を伺いたいのですが？

大倉 若いころの夢は、今考えたら大きいような小さいような…。3年の時に出演した国立音楽大で出演したいと思った夢は、30年後に叶いました。世界で活躍していた小澤征爾さんと共演したいと思った夢は、オペラ・デビュー後すぐに叶い、オペラや交響曲、宗教曲を沢山歌わせていただきました。郷里いわきで本格的なオペラを上演すること…。未だ叶わず…。そして今の夢は、一生オペラ歌手でいることかしら？

―学生に何かエールを？

大倉 せっかく国立音大に来て学んでいる以上は、本物の音楽に触れて、音楽って本当は何だろうということを考えてほしいと思います。演奏家を目指す人は、楽譜を読み取る力や音楽を表現する力を養って、CDや映像などに頼り過ぎず、生の音に触れて、自分の耳を育てて欲しいです。音楽だけ

で生活していくのは難しいですが、音楽と共に生きていくことは出来ます。この間も何年か振りに声楽科の同期会があったのですが、この年になると、学生時代に優秀だった人達が活躍しているかといったら、そうでもなくて、ただひたすら向きあつて頑張ってきた人が音楽にたずさわって生きていたりするので。続けているからこそ音楽で生きる今がある。一度しかない人生ですから、夢を大きく、心から自分を信じて、夢を実現させるための努力をしてほしいです。具体的な夢を持てば、それに向かつて努力するはずだから…。

―先生の、音楽に対する誠実さと、それをとても大事にしているらしやるといことがよく分かりました。きょうは、どうもありがとうございます。

大倉先生おすすめの本

- ※『音楽の聴き方』 岡田暁生著 中公新書 請求番号●J161-N0
- ※『小澤征爾さんと音楽について』 村上春樹×小澤征爾 新潮社 請求記号●J121-756
- ※『動きが心をつくる』 春木豊著 講談社現代新書 請求記号●J112-602

館員からのおすすめ図書

『日本オペラ史 下(1963)』(関根礼子著 水曜社 請求記号●J121-N2)
 2008.176に 日本オペラ史における「アラベツ」上演の画期的な位置づけと、標題役・大倉先生の名演が感動をもつて記されています。なお、同書は膨大なデータを10年以上の歳月をかけ整理し、日本オペラ史を概観した大著で、同分野の調査・研究に欠くことのできない資料と言えます。

大倉先生CD～当館所蔵資料から

所蔵番号	タイトル	作曲者	発売番号
1 XD52742-3	口短調ミサ BWV232.	バッハ	BAMG-0004/5
2 XD39394	平尾貴四男作品集3 「書かれなかったオペラ」	平尾貴四男	ALCD9010
3 XD1771	交響曲第9番	ベートーヴェン	JVDC1065
4 XD39632	交響曲第9番	ベートーヴェン	PCCL00386
5 XD52335	交響曲第9番	ベートーヴェン	OVCL00148
6 XD23768/9	交響曲第8番	マーラー	FOCD9026/7
7 XD63024	交響曲第8番	マーラー	OVCL00379
8 XD639	真夏の夜の夢	メンデルスゾーン	C37-7564
9 XD48818	オペラガラコンサート	モーツァルト	FPCD3655

●いちかわ としつぐ 突然の悪天候、雷鳴轟く一瞬もありましたが、室内は終始豊かな美声に包まれ、先生の音楽や学生への熱い思いを拝聴する心暖まるインタビュー・タイムとなりました。